

私と日本演劇

李 応 寿

還暦もすぎると、当然ながら、今まで生きてきた人生がこれから生きる人生より長かったことに気づく。それでか、昔から人々は、還暦を人生の大きな節目として認識し、この時点で改めて過去を振りかえり、新たに、未来を設計するようだ。いわば人生という山から下りる準備をするのである。

私も、その例外ではない。去年還暦を迎えたが、夏になって、理由もなく、白頭山ベクトルザンに登りたくなった。それで、韓半島（朝鮮半島）の最高峰にある天池チヨンジに向かいながら、ゆっくりと、今までの人生を振りかえる機会を得た。そして、そこで思いついたのが「日本演劇」というキーワードである。

思えば、私と日本演劇とのつながりは、中学時代の映画好きに始まる。私は京畿道の清平チヨンピョンという田舎に生まれたが、小地主の息子であったせいも、自分の好きなことはあくまでもやり通したが、やるやんちゃな性格を持っている。そして、その現われのひとつが映画であった。

映画好きになった具体的なきっかけは思い出せないが、中学のころ、年に何回も都心の大韓劇場テイルンや中央劇場チュンヤンなどの大型劇場に教師に引率され、今は名画劇場を飾る「ベン・ハー」(Ben-Hur)や「ドクトル・ジバゴ」(Doctor Zhivago)などを観た覚えがある。

それは、おもしろかった。特に、七〇ミリで大型スクリーンに繰り広げられる異国の風情

と、それに伴う世界のトップ・レベルの俳優たちの演技には目を奪われた。それで私は、今も、チャールトン・ヘストン (Charlton Heston) やオマー・シャリーフ (Omar Sharif) のファンである。

もちろん、好きな女優もいた。「ドクトル・ジバゴ」のラーラ (ジュリー・クリステイ扮) も魅力的であったが、高校に入り、思春期になってからは、カトリーヌ・ドヌーヴ (Catherine Deneuve) に魅せられ、『シエルブルの雨傘』や『別離』などを何回も観ている。

それに、毎月日本の映画雑誌の『スクリーン』を購入して隠れ読み、一〇年近く保管したこともある。しかし、それは大学の入試に響いた。私は一次入試では、ソウル大学の地理学科を志願していた。しかし、当時のソウル中・高等学校の出身は半分以上がソウル大学に合格したにもかかわらず、見事に落ちてしまった。

それで、ソウル大学にはない専攻ということで韓国外国語大学の日本語科に入学し、善きにして、悪しきにして、日本と縁を結ぶことになる。大学に入るや、私は、いち早く校内の演劇サークルに入った。それは、演劇が映画に似ている、いやむしろ「活きた映画」であると思っただからである。

そこには、今や韓国の国民俳優といわれる安聖基^{アンソンギ}がいた。安聖基は、私の初舞台を演出した。一九七三年、つまり一年生の夏のこと、演目は、アントン・チェーホフ (Anton Chekhov 一八六〇〜一九〇四) の『熊』である。学生売店の地下の仮設舞台であったが、男性主人公のグレゴリ・ステパノビチ・スミルノフ役を演じ終えた時は、実に、快感を覚えた。

それから、学年が上がるにつれ、スタッフ、企画、助演出、演出を担当するようになり、その都度満足感は増していったものの、逆に、専攻の日本語の勉強は疎かになっていった。あげ

くの果て、三年生になった時点では、いよいよ進退を決めなければならない状況に陥ってしまった。

そこで考えたのが、専攻と趣味の接木である。私は、日本語科に提案した。日本語の原語演劇をやるうじゃないかと。理由は簡単である。自分の日本語の能力を上達させたかったからである。そしてそれが、出演する学生たちの日本語能力をも向上させ、ひいては、韓国外国語大学の日本語科の団結にも役立つと思ったからである。

先生たちは、快く許可してくれた。作品は『白鳥』、演出は私である。しかし、いざ始めてみると、奈良時代を背景とする作品であるだけに、舞台装置はむろんのこと、衣装や扮装など、すべての分野で古代の雰囲気を出さなければならない。それに、演出家の語学力も足りない。

私は、途方に暮れていた。その時、指導を買って出たのが熊田和子先生である。先生は毎日のように稽古場を訪れ、髪カミの結い方から袖の長さまで細かくチェックをし、直してくれた。そのおかげか、男の主人公を演じた具延鎬クジョンホさんは、今や中央チュウヤン大学の教授となり、日本の古典文学を教えている。

私も、たいへん勉強になった。当時は、今のようには日本往来が自由な時代ではなく、日本語に接する機会が少なかった。したがって、日本語に自信を持っている人でも、清音と濁音の区別はもとより、長音の長さを間違う人が多かった。そのような雰囲気なかで、いちいち矯正してもらった機会に恵まれたのである。

しかも、私は演出という重責を担っている。出演者はそれぞれ自分の科白を覚えれば済むのだが、演出家は、そうはいかない。出演者を指導しなければならない立場にもあるので、戯曲を丸ごと暗記しなければならない。先生のたび重なる指摘に加え、この丸暗記が非常に役に

立った。

基礎を固めてからは、自由自在に羽を伸ばした。繁華街の明洞^{ミョンドン}に出て見知らぬ日本人に話かけたり、日本人留学生の集いと聞けば駆けつけては、ビールをおごったりした。なかでも、同じ演劇部の在日韓国人留学生の李東石^{イドンソク}さんとは、一年生の時からずいぶん親しく過ごした。

やがて私は、日本の文部省の国費留学生に選ばれた。そして、外大演劇部主催の手厚い送別会で、今は牧師になって鉄原^{チルウォン}で開拓教会を運営する金東旭^{キンドンウク}会長から「韓国の土」入りの宝石箱を手渡され、それを胸に抱え、日本の地を踏んだ。一九八〇年の春のことである。

以後、私は、東京大学大学院人文科学研究科、後の総合文化研究科の比較文学比較文化専門課程で、帰国までの七年半のあいだ、研究生、修士課程を経て、博士課程を修了するのだが、そのたびに、いろいろな人にお世話になった。まず、私を東京大学に導いてくれたのは、映画評論家の四方田犬彦さんである。

四方田さんとは、祥明大学^{サンミョウ}の日本語演劇の時に出会った。演目は、確か三島由紀夫の「近代能楽集」のなかの『綾の鼓』だったと思う。四方田さんが演出、私が演技指導を担当し、二ヶ月ばかり、共に稽古に励んだ。そしてその過程で、彼は映画、私は演劇ということもあり、意気投合した。

あの村正熙^{ムラシネ}大統領暗殺事件の直後のこと。慌しい社会雰囲気なかで、私の留学先が決まらなくて困っていた時も、彼は、折りよく韓国を訪れていた小山弘志先生を紹介してくれた。その小山先生の推薦状で、私の東大行が決まったのである。運命は予期しないところから訪れるというが、再三、実感した。

東京大学に来てからは、小山先生の授業で能や狂言の中世古典劇に親しむかたわら、小宮

彰、大澤吉博、上垣戸憲一といういわば三羽鳥の先輩に誘われ、三宅坂の国立劇場で『菅原伝授手習鑑』を観たこともある。古語のため、内容こそ追いつけなかったものの、華やかさ極まる歌舞伎の舞台が印象に残っている。

チューターの菅原克也さんにも、ずいぶんお世話になった。彼は、日常生活はもとより、数々の演劇情報を教えてくれた。彼の誘いで、新宿中央公園の仮設テントで劇団四季の『キャッツ』を観た時は、日本のテント劇のスケールの大きさや繊細な舞台装置、そして俳優の歌唱力に圧倒された。

また、演劇情報誌の『びあ』や『ロード・ショー』を頼りに、観劇に出かけたことも、多々ある。つかこうへいの『熱海殺人事件』は、紀伊国屋ホールで観た。それで渋谷の宮益坂にある彼の事務所を訪れた時、つかさんが、自分の本名は金峰雄^{キンボウウツ}、故郷は慶尚北道の清道^{チヨンド}であると語ってくれたことが、今も、記憶に新しい。

このように観劇にふけている最中、月刊誌『韓国演劇』から、日本演劇の状況を海外演劇情報欄に連載するよう頼まれ、李青雨^{イチョンウ}というペンネームで書いた。とはいっても、アングラ演劇の巨匠鈴木忠志さんが富山県の利賀村で劇団SCOTを旗揚げした時は、「利賀」の読み方が判らず、苦勞したこともある。

鈴木さんとの因縁は、帰国後も続く。それは、韓国の金義卿^{キムウィキョク}、中国の徐曉鍾、日本の鈴木忠志の三人が「BeSeTo（北京・ソウル・東京）演劇祭」を立ち上げた一九九四年から、立案者の金義卿さんの勧めもあり、私も、韓国側の委員に加わったからである。

BeSeTo活動のなかで最も印象に残るのは、二〇〇〇年の『春香伝』の上演である。韓国の国立劇場の大劇場で、第一幕（愛）を中国の浙江省小百花越劇団が、第二幕（受難）を日本の

松竹歌舞伎座が、第三幕（再会）を韓国の国立唱劇団がそれぞれ演じたが、三国の古典劇の様式比較のできる、実りのある舞台であった。

それから、『Beseto 演劇祭一〇年史』を編んだ時のことも記憶に残る。この本は、もともと三カ国語で出版する予定であったが、時間が延び、経済的な制約が重なるにつれ、関係者のエッセイだけを二カ国語にする線で世に問うた。しかし、休日を問わず、夜遅くまで作業しつづけた日々になつかしさを感ずる。

その後、私は、韓日演劇交流協議会で活動するかたわら、『日本演劇史』を翻訳したり、書いたりもした。また、二〇〇三年には洪善英らと共に「日本演劇を観る会」を結成し、以来、毎月日本演劇を観ている。その記録が『日本演劇を観る会一〇年史』で、出版に際しては、南声鎬さんや黄石珠さんの助力に負うところが大きかった。

還暦という峠を越えながら、今までの人生を振りかえるという意味で、「日本演劇」をキーワードに、記憶に残ったものを思い出すままに書いてみた。書き終わってみると、それなりに演劇、なかでも日本と韓国の演劇交流という大きな山を、ひたすら登り続けてきたような気がする。

さて、これからは下山である。下山については、五木寛之がおもしろい説を披露している。彼は、下山にも「思想」が要ると前提したうえで、下る時が登る時より転びやすい。だから一度転んでも、再び頂上を目指すことなく、軟着陸を試みるべきだと主張する。流石だ。私も、これからは、彼の説に従うことにしよう。

二〇一五年の暮れに。

（世宗大学校韓日芸能研究所長／国際日本文化研究センター外国人研究員）